

県版レッドリスト改訂：植物編

尾関雅章・大塚孝一・横井 力

■改訂版の刊行にむけて

県版レッドリスト改訂版の植物編は、2013年度末に発表される予定となっています。

これまで、2013年9月から10月にかけて、長野県版レッドリスト（維管束植物）の改訂（案）を公表し、ご意見をいただけてきました。今後、維管束植物以外（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）、また植物群落についても改訂案を公表し、ご意見をいただいた後、刊行作業をすすめる予定です。

■維管束植物

前回のレッドデータブックで絶滅危惧種（絶滅危惧IA、IB、II類、準絶滅危惧）に取り上げられた植物の分布の様子を5倍メッシュ（およそ5km四方）でまとめてみました（図1）。県下にかかる全615メッシュのなかで、絶滅のおそれのある植物が0種類であったのは、わずか40メッシュ。つまり、絶滅のおそれのある植物は、ほぼ全県にわたりみられるということがわかります。

絶滅のおそれのある植物が決して珍しいものではなく、身近な植物のなかにもあるということは、身近な環境もずいぶん変化してきたことを教えてくれます。

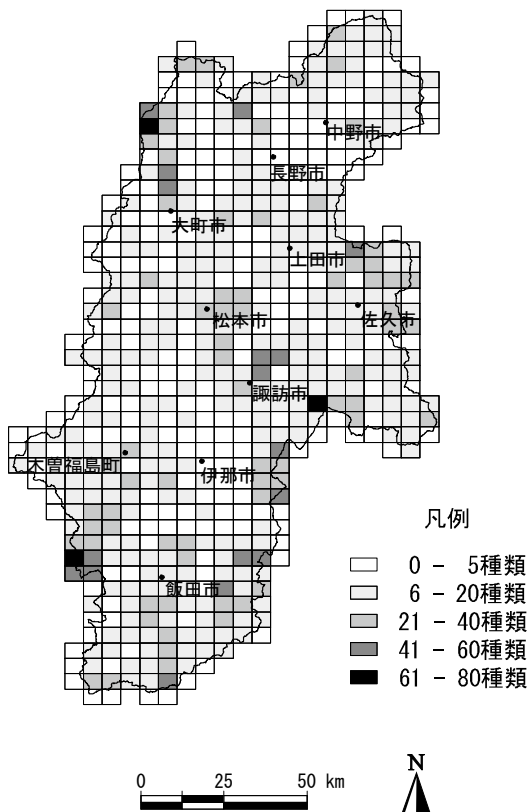


図1 絶滅のおそれのある植物の分布密度（2002年版）

前回のレッドデータブックで“絶滅種”としたコケリンドウ（リンドウ科、写真1）は、日当たりの良い草原に生える背丈の低い越年草です。以前に標本記録のある軽井沢町では、草原は町内に広くみられました（図2）。現在はその多くが森林や別荘地、ゴルフ場などに変化しており、こうした環境の変化によって身近にあった野草が減少していったのでしょうか。

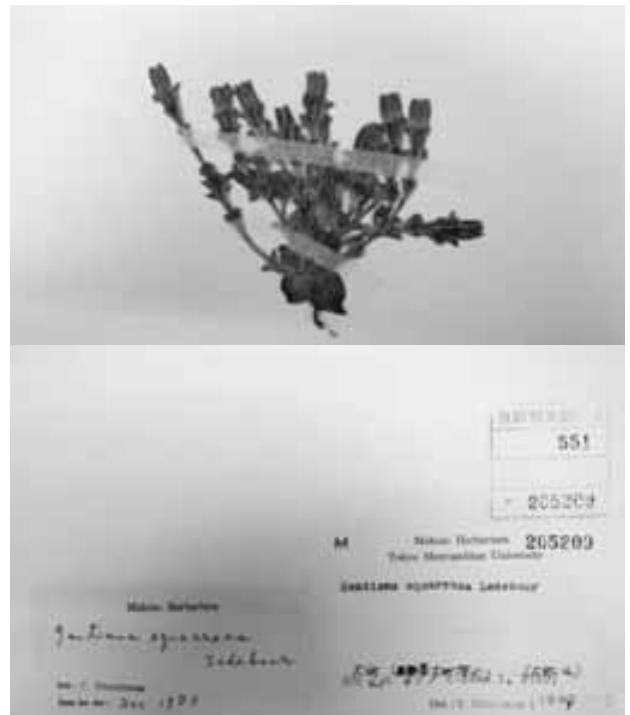


写真1 大町市で明治43年に採集されたコケリンドウの標本（牧野標本館収蔵）

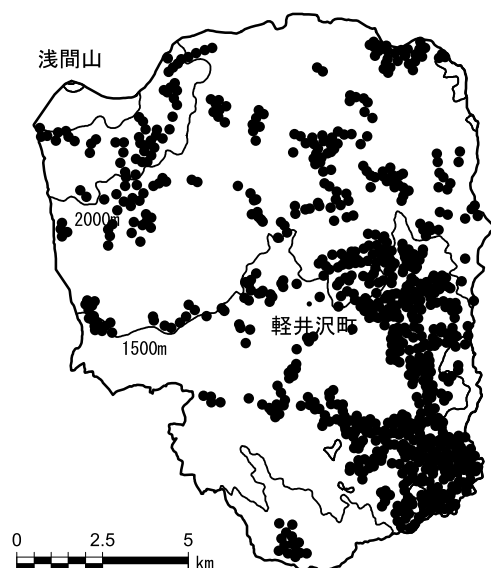


図2 大正元年ごろの軽井沢町内の草原・荒地（●）。地形図をもとに作図。現在は、草地はこれほど多くみられない。

しかし、絶滅したと思われていたこのコケリンドウは、今回の改訂で絶滅種からは変更となります。富士見町や茅野市で再発見されたのです。こうした絶滅危惧種の再調査の積み重ねにより、今回の改訂作業はすすめられています。今回の改訂調査では、他にも、絶滅種とされたマメダオシ（ヒルガオ科）の標本記録が確認されたほか、前回情報不足とされたイワレンゲ（ベンケイソウ科、写真2）の標本確認などがなされており、それぞれカテゴリーの変更が検討されています。また、植物相研究のすすんでいる長野県でも、長野県新産種も見つかっています。イトハコベ（ナデシコ科、写真3）は、2012年に長野市で発見された植物で、県内では産地が非常に少なく、絶滅のおそれもあることからレッドリストへの新規追加が検討されています。



写真2 イワレンゲの標本（環境保全研究所収蔵）

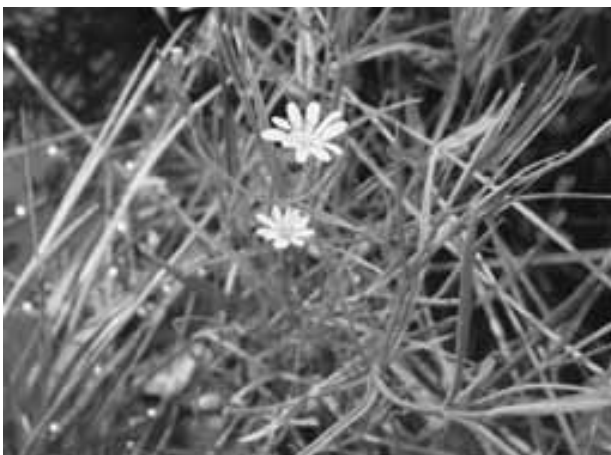


写真3 イトハコベ（中村千賀氏撮影）

一方、長野県の植物をめぐる環境変化のうち、前回のレッドデータブック作成時から最も大きく変化したのが、ニホンジカの採食圧の増加でしょう。南アルプスや

八ヶ岳などでは、高山のお花畑も一変しました。今回の改訂調査で、絶滅のおそれのある植物のうち、ヤシャイノデ（オシダ科、写真4）やタデスマレ（スミレ科、写真5）、ホテイアツモリ（ラン科）など、多数の種類でシカの採食による繁殖個体数の減少が報告されています。前回のレッドデータブックでは、絶滅危惧の要因としてシカの採食圧があげられていなかったことを考えると、過去10年間で、シカの野生植物への影響が県内で急速に拡大したことがうかがわれます。



写真4 ヤシャイノデに残るシカの採食痕



写真5 タデスマレに残るシカの採食痕

■レッドリスト改訂をふまえて

絶滅のおそれのある生き物が集中している場所は、生物多様性ホットスポットと呼ばれます。では、長野県内で生物多様性ホットスポットはどこでしょうか？

前回策定結果により作成した地図（図1）は、この生物多様性ホットスポット地図の一つですが、この地図も、今回のレッドリスト改訂結果をふまえて改訂する必要があります。こうした地図は、レッドリスト改訂結果の全県的な様子を知ることのほか、長野県の生物多様性ホットスポットの位置と特性の解明をすすめることにも役立てられます。